

禁煙治療薬・バレニクリンとブプロピオンには ニコチン代替療法薬を上回る自傷行為リスクはない

英国や米国では、ニコチン依存症治療薬のバレニクリンやブプロピオンにより自傷行為リスクが上昇する可能性が指摘されており、安全性が懸念されている。その機序については、ニコチン受容体に作用するこれらの薬が衝動性や攻撃性に影響を与える可能性や、喫煙行為自体に抑うつ状態の治療効果があり、禁煙によりうつ病が進行して自殺リスクが上昇する可能性が示唆されている。そこで、本研究では、バレニクリン、ブプロピオン、ニコチン代替療法薬を処方された患者の自殺や自傷行為、うつ病のリスクを比較した。

被験者はイギリスで2006年9月1日から2011年10月31日にバレニクリン、ブプロピオン、ニコチン代替療法薬のいずれかを処方された18歳以上の患者119,546人とした。使用薬の割合は、ニコチン代替療法薬は81,545人(68.2%)、ブプロピオン6,741人(5.6%)、バレニクリン31,260(26.2%)であった。致死性・非致死性自傷行為は92件、うつ病は1,094件発生した。Cox回帰分析によると、バレニクリンはニコチン代替療法薬と比較して致死性・非致死性自傷行為やうつ病の発症が低かった(危険率はそれぞれ0.88、0.75)。ブプロピオンについても、同様であった(危険率はそれぞれ0.83、0.63)。

したがって、ニコチン代替療法薬の使用に比べて、バレニクリン、ブプロピオンの使用による致死性・非致死性自傷行為やうつ病のリスクの上昇はみとめられなかった。禁煙治療薬を服用する患者やこれらを処方する医師に安心をもたらす結果となった。

出典：British Medical Journal. 2013; 347: f5704 doi: 10.1136